



亜麻の里ふたたび

有限会社亜麻公社

札幌にほど近い石狩管内当別町に亜麻を栽培している畑があります。亜麻は6月下旬から7月の初めにかけて薄紫色の花を咲かせ、8月中旬には成熟した種子になります。亜麻を作っているのは契約農家の(有)大塚農場で、契約元は札幌にあるベンチャー企業の(有)亜麻公社です。

明治初期から昭和40年代まで道内各地で国策として広く栽培されていました。札幌市にある「麻生」や江別市の「大麻」の地名もその名残りです。かつては繊維のみに利用されていた亜麻ですが、(有)亜麻公社は近年明らかになってきた種子の保健機能に注目して、7年の年月をかけて種子から亜麻仁油^{あまにゆ}の抽出に成功しました。40年ぶりに亜麻栽培を復活させ、亜麻産地としての地域おこしに一役かっています。

(有)亜麻公社の橋本眞一社長（株北海道技術コンサルタント代表取締役）に栽培に取り組み始めた経緯と今後の展望についてうかがいました。

北海道の資源を活かした事業を

10年ぐらい前から公共事業が減少することは必然だと考えていました。本業でも自然環境分野、応用生態工学や新しい防災技術に取り組みました。

また、海外進出も視野に入れて二回、サハリンに視察・調査に行きましたが、当時は今ほどロシア経済も上向きではなく、道路もガードレールがない砂利道で、河川や護岸の整備も後回しでした

ので、サハリンでの治水関連事業の展開は断念しました。

そこで、持続可能な新しい事業を興すなら北海道の資源を活かして雇用の場を作ろう。北海道の主要な一次産業である農業の産品に付加価値をつけ、本州に、将来は海外にも売り込もうと考えたのです。

北海道の資源は何かと云ったら、冷涼な気候と広大な土地です。本州にはない有利な条件です。米や麦といった汎用の作物への参入は難しく、調べている中で過去に特用作物^{※1}として換金作物の特徴を持っていた亜麻が栽培されていたと知りました。ヨーロッパの気候風土に似ている北海道は亜麻の栽培に適しているということで、開拓使時代に榎本武揚がロシアから情報を仕入れてはじめてのが最初だといいます。

地域に根ざした事業をめざして

新規事業を進めるため、2001年に(株北海道技術コンサルタント)内に「起業推進室」を新設、亜麻仁油の商品化に向けて調査を開始しました。最初は、亜麻から繊維を作ろうと研究をしていましたが、良い繊維ができません。また、繊維をとる過程で出る濁水の処理などに大規模な設備が必要になることから事業化は難しかったのです。

そうした研究を続けている中で、亜麻の種子から採れる油に健康に良い成分があることが分かりました。3年後の2004年に商品化のめどが立ち、同年2月(有)亜麻公社を札幌市に設立しました。

私は技術屋ですから、公式をあてはめて計算し図面を画くと結果が出せます。ですが、亜麻栽培は天候に左右されやすく、商品販売では顧客のニーズを把握する必要がありますから、どうしたら気に入ってもらえるのか、どうしたら買ってくれるのか、まったく分からないところからここまで来ました。

会社を作るときには、7世代先までの世代が続けられるような事業を目標にしました。これは、アメリカの先住民族が部族内で物事の取り決めをするときに、そのことが孫の孫の孫の世代にとってもよいものかどうかで決めるということに倣ったものです。ブームで火がついてヒットしても一過性ではいけません。地域に根ざした資源を活か

※1 特用作物：食用以外の用途にあてるために栽培する農作物。綿・桑・麻・藍（あい）・タバコ・茶など。

し付加価値をつけて、雇用や地域経済の活性化につなげていくことが大事です。7世代先の210年後まで続くような事業を目指したいと思っています。

亜麻の栽培地域では、7月にあそこに行けば亜麻の花が見られるなど観光資源にもなると思うのです。おかげさまで応援してくれる人も増え反響も多くなってきています。

北海道亜麻ルネサンスプロジェクト

そこで、亜麻の油を活かした商品開発を亜麻公社、販売会社、農場の連携で実施することにしました。これが、2005年度の北海道経済産業局の異業種連携により新事業にチャレンジする中小企業を支援する「新連携対策補助事業」連携体構築支援事業に採択され、「北海道亜麻ルネサンスプロジェクト」の取り組みを開始しました。

外国では亜麻仁油をバター代わりにパンに付けて食べる習慣もあり、国内でも徐々に亜麻仁油商品が広がってきている状況でした。亜麻仁油は、食用のほかに、油絵の具、木工のニスとしても使われています。また、アトピーの症状を軽減する成分が含まれていることから、病院や住宅の塗料や床材に使用されるなど用途は豊富です。

しかし、工業用としては大量生産が必要になります。そこで、ある程度の生産量でも、すぐ収益性が期待できるサプリメント（瓶詰めの亜麻仁油オイル）を開発することにしました。

亜麻仁油は、酸化しやすい油で高温になると変質し有効成分が変わってしまいます。瓶に入れて



使用しても少しずつ酸化してしまいます。また、低温で圧搾しなければならないという条件もあります。北海道にある油脂製造工場では抽出方法が高温抽出なので無理があり、低温圧搾の機械をドイツから輸入しなければなりません。また、商品化して提供した場合の油の変質を抑える方法として、カプセルに入れれば酸化しにくく飲みやすくなるのではと考えました。国内で流通している亜麻仁油の商品は輸入したものです。国内で生産した種子から採った油をサプリメントにしたものは亜麻公社だけです。本州は高温多湿の気候で亜麻の栽培は難しく歴史も文化もありません。純国産の「亜麻仁油」は北海道でしかできない商品なのです。

無農薬栽培の苦労

今年の栽培地域は、当別町、新十津川町、札幌市東区で、全体で6.5haになります。当初は、当別町の(有)大塚農場さんに試験的に栽培してもらい、その後厚沢部町、月形町、士別市などでも試みたのですが、害虫で全滅して収穫できなかったこともあります。農家とは無農薬栽培を契約しています。無農薬ですから除草も大変で、虫が発生したときは食品として使えないのです。また、仮に農薬を使うとしても新しい農薬の法律では栽培品種ごとに登録されている農薬しか使えません。亜麻は未登録の作物だったので殺虫剤が使えなかったのです。急ぎよ費用をかけ農薬殺虫剤登録をしましたが、今は殺虫剤ではなく忌避剤（松ヤニと唐辛子のエキスを使った天然系の防虫剤）を農家と検討して使用しています。

一番困るのは、亜麻畑で発生した夜盗虫^{※2}が

※2 夜盗虫：ヨトウガ類の幼虫。暗褐色の中型のいもむしで、昼間は土中に隠れ、夜出て野菜類を食べる。

新連携による「国内唯一の北海道産亜麻種子を原料にした高付加価値商品の開発」



隣の畑に移動して迷惑をかけることです。そうすると、そこでの栽培が継続できなくなってしまいます。それと除草です。一番広い畑で1haぐらいですが、年に何回も除草しなければなりません。茎の短い間は機械でも除草できますが、背丈が高くなると機械での除草が難しく、どうしても人力での除草が必要になります。

地域の活性化に向けて

2007年度は、当別町の産業振興課がまちおこしのひとつとして町のHPにリンクしてくれるなど、応援してくれています。また、同年7月、大塚農場さんが中心になって当別町の10軒の農家による「当別町亜麻生産組合」が発足しました。この取り組みが2007年の農林水産省の「立ち上がる農山漁村」という表彰制度で選考されました。また同時に、亜麻公社も全国で3団体の一つとして「立ち上がる農山漁村～新たな力～」に選考されました。

現在は、当別町の亜麻生産組合と、4Hクラブ^{※3}の青年・天使大学看護栄養学部栄養学科の学生とのコラボレーションで、亜麻の草取りと亜麻種子を使ったお菓子を作る商品開発に挑戦中です。若い人たちが亜麻に興味を持って元気よく活動してくれているのでとても力強く思います。

事業としては、お菓子や繊維も工房的な発想だけではなく、ある程度の価格で安定的に売れなければいけません。町の商店と協力して作ったお菓子が有名になって、その相乗効果で亜麻のサプリメントの方も認知度が広がってくれればと思います。4Hクラブなどがそういう活動をしてきているので期待しています。

最近少しずつですが、昔見た亜麻栽培の風景をもう一度見てみたいという人が全道的に増えてきています。2007年6月には当別町の住民が「亜麻の花咲く村」という絵本の原画展を開催し、亜麻公社も協賛しました。地元でも北海道の亜麻の歴史、文化をまちづくりに活かそう、子供たちに伝えようという動きがあります。これは、地域の人が大塚農場の亜麻を見て触発されたと聞いています。

最近、アンチエイジング（老化防止）に関心を持つ女性が多くなっています。そうしたお客様



をターゲットにした商品開発に取り組んでいます。また、亜麻仁油を使った既存のドレッシング商品がありますが、価格が1本2,000円ほどと高価です。ところがドレッシングは、100円ショップにも置いているし、スーパーでも200～300円程度で買うことができます。そこで安く家庭に提供できるように、苗穂町にある福山醸造さんと連携して亜麻ドレッシングの商品開発をしています。コストダウンが成功すると道内のみならず本州へも販路が期待できると考えています。

この春、商品の販売を担当している(有)ウイズユー・コーポレーション（札幌市）が、(株)北国生活社、(株)北海道技術コンサルタント、そして私ども亜麻公社と共同で申請していた、農林水産省・経済産業省が共管する「地域資源活用売れる商品づくり支援事業」に認定され、本年度から亜麻の商品開発や拡大事業に補助を受けられることになりました。

*

亜麻事業をしている人から「なぜ、亜麻なのか？」と簡単に質問されますけど、本当はよくよくなんです。「なぜ、北海道で亜麻栽培をしたのか？」ではなく、「北海道だから亜麻栽培」なのです。北海道でしかできない一次産品に付加価値をつけて試行錯誤した末の亜麻栽培のスタートでした。今後は、亜麻栽培を全道に広め、亜麻仁油を「北海道ブランド」として道外、さらには海外へも売り込んでいき、最終的には北空知を中心に食用油、十勝地方では繊維用の亜麻栽培ができれば、建設関連産業の総需要が減ったとしても、新しい地域活性化につながるのではないかと考えています。

※3 4Hクラブ：よりよい農村、農業をつくるために活動している団体。1890年から米国で始まった農業系の大学や研究所を中心とする青少年への教育活動が起源とされる。1918年ころにHands、Head、Heart、Healthの四つのHの頭文字から「4Hクラブ」の名称で活動するようになったといわれている。

有限会社亜麻公社HP

<http://www.amakousya.co.jp/>

株式会社北海道技術コンサルタントHP

<http://www.dogi.co.jp/>